『比較民俗研究』11. 1995／3

“うなり板”のことなど

藤本　英夫※

ここしばらく，なにかを調査するとか研究するような機会，場所から離れていたので，この場に書かせていただくのは面映ゆい。

先日，数人の若い人たちと雑談中，そこにいた沖野慎二氏（北海道大学農学部付属博物館文部技官）から面白い話を聞くことができた。私は知らなかったアイヌの“うなり板”の話である。“うなり板”は世界的に広く分布している。この話を聞いた後，大阪の“みんぱく”で『ラテンアメリカの音楽と楽器』展でその“うなり板”を興味深くみせてもらったが，沖野氏によると，それはアイヌにも存在していた。そのことを彼が知ったのは，N. G. マンローの「アイヌ：信仰と礼儀」からであるが，他にこれを記録した例は見たことがないという。

雑談会のそこにいた数人は，氏が話す“うなり板”の父権社会の象徴，あるいは男の属性をもった楽器としての民俗学的な役割りに楽しく耳をかたむけた。

彼は音楽に深い造詣をもっている。特にヨーロッパの古い民族楽器に関心があり，彼自身，気鳴楽器の奏者でもある。

彼が，マンローのそれを読んだのは七年ほど前であるが，マンロー以後の，アイヌ社会ではどうなっているのか，気になりだしたのは，もう少し後のこと。あるとき，民族楽器グループと談合中，気鳴楽器の仲間であるアイヌの“うなり板”を書いた，マンローの記述が気になりだした，と自分がアイヌのそれに関心を寄せたいきさつまでも聞かせてくれた。

その後，私は，氏の論考を読ませてもらった。「アイヌ民族に“うなり板”は実在したか？－N. G. マンロー「アイヌ：信仰と礼儀」のある記述をめぐって－」（『北海道北方民族博物館研究紀要第3号』1994）と，ちょっと長いタイトルがそれだ。

マンローに触発されてしばらくしてから，氏が十勝地方に残っていた「風起こし」儀礼を知り，アイヌに“うなり板”が実在していたことを確かめるまでが楽しく書かれている。

沖野氏が，十勝アイヌの「風起こし」儀礼を知ったのは，内田祐一氏（帯広百年記念館）のレポートからだった。内田氏は，「何かの理由で風を吹かせたいときは，レラ　スイェプ(rera suyep)といって，棒の先に紐を付け，その先にへら状の長さ3尺から5尺ほどの板を縛り，ふりまわす。そうするとひどく大きな音がして，そのうちに風が吹きはじめる」（「帯広伏古コタンにおけるまじない・占いについて」『トカプチ』十勝郷土研究会1989）と，報告していた。沖野氏は，「これこそ“うなり板”」と言っている。

ここにいきつくまでに，沖野氏は数多くの「研究者と民族音楽愛好者，アイヌの人たちを手当

※北海道文化財保護協会専務理事

たり次第尋ねても」,「知らない」「みたことがない」「そんな話聞いたことがない」「本当かなあ？何か間違えたのでは？」「マンローは夢を見たのでは？」などの答えが返ってくるばかりであった。「一体これはどういうことであろうか？」。

最近は，民族音楽ブームもあって，CD やヴィデオで他の民族の演奏から各地の“うなり板”は聞くことができるのに，「もしかすると，アイヌ民族がかってうなり板を使用していたかもしれない，ということを知る人はどれだけいるであろうか？」と，彼はさびしさをもらしながら，たどりついた視座を次のように書く。

（前略）近代から現代にかけて（特に明治時代以降）北海道の急激な開拓政策に伴う近代化と和人文化流入の過程でアイヌ民族の伝統文化は急速に変容していったと一般に言われており,（中略）これまで多くの文献で語られている「アイヌ文化」はほんの上“澄”みにしか過ぎないのではないか？我々の知らない多くの失われた“物”“感覚”“行動”があったのではないか？アイヌ文化はもっと多様でもっと広がりと奥行きをもっていたのではないか？という疑念が当然のことながら生じてくる。（後略・傍点傍線引用者）

私は，ここを読みながら，記憶の底に沈んでいた，ある一つのことを思い出した。それは，萱野茂氏（参議院議員）の『アイヌの民具』（アイヌ民具刊行運動委員会1978）所収のカシンタ Ka-shinta（水鳥のわな）のことである。これも，萱野氏によって報告されるまでが似ているのだ。

沖野氏が勤務されている北海道大学博物館には古くからアイヌの民具の優品が収蔵されている。そのなかには，明治の始め，開拓使があつめた当時のアイヌ民具もある。

あるとき，必要あってそれの写真撮影をしていたら,「カシンタ」と名札のついたものがあった。J. バチラーの辞典には,「Kashinda 鳥ヲ取ル羂」とあるが用法が分からない。手近な文献をみてもなかった。萱野氏に聞くと,「ユーカラのなかにあるが，実物は見たことがない」という。氏は，早速，件のカシンタを実見，同じものを幾つか作り，実験して，一番使いやすいものを，平取町二風谷資料館に展示した。『アイヌの民具』にはこう解説されている。

これは水鳥をとるわなです。

あまり太くないぶどうずるを大人の両手で輪を作ったぐらいの大きさにぐるぐるっと巻いて輪を作り，輪の中に細い糸でわな輪を仕掛けます。その輪を紐につけて木につなぎ，沼などの深さ５～10㌢程度の浅い水に浮かべ，わな輪をひろげてその下に餌をまいておきます。水鳥がきて餌をとるために輪の中のわな輪に首を入れ，首をあげるとわなにかかる仕掛けです。名前は糸のゆりかご（カ＝糸，シンタ＝ゆりかご）などと名ずけてあっても，鳥ににとっては地獄のゆりかごとなるのがこのカシンタです。

この解説，あたたかい。

これなど，“物”“感覚”“行動”が復元できた例であろう。

私はふと，泉靖一先生の言葉の中に，先に引用した沖野氏の文の傍点傍線部分につながるところがあったのではなかったか，そんな気がして探してみた。

（前略）民族文化の記述を一般に民族誌とよんでいる。これらの人々は，明治初年このかた今日まで，さまざまな側面からアイヌの民族誌を書きつづけてきた。その量はばく大で，視角もまた多方面にわたっている。しかし，学問の関心はつねに変動し，それまで隠されていた面にむけられる。そういう角度からみると，これまでのアイヌ民族誌では満足できない側面が，間断なくあらわれてくる。（後略・「民族誌としてのアイヌ絵」『アイヌ絵の世界』1968）

“視座”もみえない糸でつながるものだな，と思った。

新刊紹介

藤本英夫著

『泉　靖一伝ーアンデスから済州島へー』

著者の名前は大学一年の夏，根室トーサンポロ・弁天島の発掘に参加するということで読んだ『アイヌの墓』(1964) で最初に知った。近年，民博の会議などで同席する栄に浴しているが，その情熱的語りにはいつも圧倒される。文学を志したという氏の文体は，『知里真志保の生涯』『銀のしずく降る降るまわりにー知里幸恵の生涯』『金田一京助』などの評伝において特に冴えわたる。人間研究を志す人類学者の人間像をその内なる心情から描き出そうとする。本書の執筆動機も，静内高校の教師時代に著者が面識を得た泉靖一が死の数年前，利尻・礼文島を旅した時に京城帝大のサークル誌に火田と呼ばれる焼畑耕作民に題材して書いた『五番目の叔父さんー火田の物語ー』の舞台に帰りたいとふと漏らした，その心象風景を探るところにあるという。山と文学に青春をかけた泉が済州島漢拏山での遭難と親友の死をきっかけに登山も止め，専攻も国文学から文化人類学に変える軌跡。指導教官，秋葉隆との交流と，卒業論文「済州島」の完成。張家口の西北研究所の面々との出会い。東京大学文化人類学教室の運営や国立民族博物館開設準備と梅棹忠夫氏との交流。これら日本の文化人類学史の一面が多くの関係者の証言を基に語られていく。韓国の友人である李杜玄ソウル大名誉教授が死の直前の泉の訪韓は“落葉帰根”といったと言う。泉にとってアンデス調査を始めとする足跡は「日本という外国で」の仕事であったのである。本書を読みながら私が民俗学の入口で教えを受けた山形県置賜民俗学会初代会長，江田忠氏も京城帝大の出身でその眼がいつも遠くを望んでいたような気がした。このシリーズの『鹿野忠雄』も含め，海外植民地下での人類学・民族学の動向とその後を検証する作業の必要を痛感した。一読を勧めたい労作である。　（佐野賢治）

1994.11刊　A5判　329頁　平凡社2,700円